

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K12945

研究課題名（和文）清代前期における朱子学関連書の編纂・出版をめぐる思想史的社会的な研究

研究課題名（英文）An ideological and Social Historical Study on the Compilation and Publication related to Neo-Confucianism in the early Qing Dynasty.

研究代表者

尾崎 順一郎 (OZAKI, JUNICHIRO)

東北大学・文学研究科・専門研究員

研究者番号：40757085

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、各地の図書館に所蔵されている漢籍、影印資料、画像資料などを活用し、明代末期から清代にかけて編纂・出版された朱子学に関連する文献の編纂・出版状況について調査を実施した。また、陸隴其の朱子学理解、『御纂朱子全書』『御纂性理精義』の編纂背景、明末の高攀龍が編纂した『朱子節要』の受容のされ方などについて考察し、その研究成果の一部については論文や学会などの場で報告を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

漢籍目録やデータベースでは最低限の情報しか示されないことから、文献の所蔵状況を整理しつつ、実際に個々の文献を閲覧して、その編纂・出版状況を調査した。また、その内のいくつかの文献を取り上げ、文献の編纂、出版、受容などに関わる活動と学者たちの問題意識との関連などを考察することで、清代前期における朱子学理解の多様さ、文献の需要・流通に関する一面を明らかにし、文献学・思想研究の面で前進を図った。

研究成果の概要（英文）：This examined the compilation and publishing status of Neo-Confucianism-related manuscripts that were compiled and published from the late Ming to the Qing era using Chinese books, facsimile editions, and image materials stored in libraries across the nation. Then, I looked at Lu Long qi's interpretation of Neo-Confucianism. The context of the compilation of "Yu Zuan Zhu Zi Quan Shu" and "Yu Zuan Xing li Jing Yi" as well as the reception of Gao Pan long's "Zhu Zi Jie Yao" towards the end of the Ming dynasty were also explored.

研究分野：中国思想

キーワード：清代 朱子学 四書学 性理学 出版 科挙

1. 研究開始当初の背景

かつて、山井湧氏は「清代の朱子学」(明德出版社、「朱子学大系」第一巻、1974年)の中で、清朝(1644-1911)一代の朱子学者を紹介し、その多くが乾隆初年以前の「清代前期」に集中していることを指摘された。ただ、この時期は多くの朱子学者が現れただけでなく、朱熹とその先学・後学らに関する著作、すなわち彼ら個々人の文集や「四書五経」の解釈書、または著作中の文章を選録したダイジェスト版などが、明代から続けて数多く編纂・出版されてもいる。

一方で、これまでの研究を振り返ってみると、その重点は清代前期の朱子学者の思想研究に置かれ、こうした書籍の大部分は思想史研究の対象とされることは稀であった。だが、こうした書籍の中には、官吏登用試験の科挙に応じるための受験参考書や、康熙年間(1662-1722)から文教政策の一環として全国に頒布された勅撰の編纂物など、時代性を強く帯びた資料も含まれている。当時の人々が、こうした書籍を数多く世に送り出していたのには、やはり何がしかの理由や目的があったはずであるし、これらの書籍自体も時代の性格や需要の在り方を反映しているに違いない。そうであるならば、彼らはこうした書籍の編纂・出版にどのような意識や認識を持ち、そしてどのようにして朱子学に関する知識を得ていたのか。本研究では、こうした書籍群を通して、当時の朱子学の在り方について検討を試みようとするものである。

2. 研究の目的

本研究は、朱子学が再興したと言われる清代前期という時代において、どのような朱子学関連の書籍が編纂・出版されたかを把握するとともに、こうした書籍群が担っていた思想的社会的な意義を探っていくことで、この時期における朱子学の在り方を新たな視点から掘り起こしていくことを目的とする。

前述のごとく、清代前期の朱子学研究は、朱子学者の思想分析に重点が置かれて来た。こうした研究は当然のことながら着実に、かつ幅広く進められるべきではあるが、本研究は明代から陸続と編纂・出版されてきた朱子学関連書に目を向け、当時の人々の朱子学需要の在り方や意識を探っていくことで、朱子学が盛んに行われた時期の学問の基層を探究していくという点に独自性がある。

そして、こうした研究により、この時期の朱子学者たちの言説の前提となっている問題意識や読書環境を知る手掛かりを得ることになると考えられる。さらに、それぞれの書籍に附された序文や跋文などからは、編纂者や出版者の意図に加え、その地域性やネットワーク、さらには出版事情などの情報を得ることができるところから、学問と社会との結びつきを掘り起こしていく糸口となり得る。そして、同類の書籍は明代や清代中期以降にも出版されていることからすると、思想史の展開を見通す際の手掛かりにもなると考えられるのである。

3. 研究の方法

本研究では、主に以下の三つの方面から調査・検討を進める。

(1) 清代前期における朱子学関連書の編纂・出版状況の調査と整理

清代前期に朱子学に関連する書籍が数多く編纂・出版されていることは、各種目録などから知ることができる。だが、管見の限りでは、どのような書籍が存在するのかを調査した研究は多くない。四書に関しては、国立編訳館主編『新集四書註解群書提要：附古今四書総目』(華泰文化事業公司、2000年)これを増訂した三浦秀一「明清四書注釈書関連二面」(「東アジア出版文化の研究」調整班(B)出版物の研究、2005年)があるくらいである。そこで、まずは国内外の図書目録やデータベースを活用し、そのリストを作成する。

また、それと並行しつつ、実際に各地の図書館が所蔵している漢籍や影印本などを閲覧し、それぞれの書籍の構成やそこに掲載された序文や跋文などの収集・整理を行うことにより、それぞれの書籍の編纂・出版の目的や経緯などを把握していく。

(2) 勅撰朱子学関連書の編纂・出版に関する調査と検討

清代康熙年間には、儒家の経典や朱子学に関する文献が勅撰というかたちでいくつも編纂されている。そこで、特に李光地(1642-1718)らが編纂に従事した『御纂朱子全書』『御纂性理精義』の調査・検討を行っていく。

『御纂朱子全書』『御纂性理精義』は、どちらも明代の永楽年間に編纂された『性理大全書』の不備を補正することを目的に編纂されたものであり、朱熹の文集や語録等から発言を引用し、内容ごとに分類している。まずは、これらがどのような経緯で編纂・出版されたかを調査する。そして、これらの書籍に引用された朱熹の言葉の出典とともに『性理大全書』との相違についても確認していくことで、両書の性格を窺っていく。

(3) 四書・性理学等の科挙関連資料に関する調査・検討

清代前期に編纂・出版された四書に関連する書籍の序文などでは、陸隴其(1630-1692)が編纂した『三魚堂四書集註大全』や『四書講義困勉録』などに言及することが多く、当時において

多くの読者を獲得していたことが窺える。そこで、この時期における四書学の展開を見通す際の切り口として、まずは陸隴其の四書学について考察を行うこととする。具体的には、陸隴其が編纂した四書に関する文献の版本調査、そして陸隴其の事跡や四書学、編纂事業などについて考察を行い、当時の四書学の在り方について、その一端を明らかにしていく。

4. 研究成果

(1) 朱子学関連の文献に関する調査

本研究では、国内外の図書館を訪問し、漢籍や影印本などを閲覧して、それぞれの資料の特徴を明らかにすることが重要な目的の一つであった。ところが、研究期間中の大部分は新型コロナウイルスが蔓延したことで、資料調査は大幅に制約され、特に中国や台湾への調査旅行は断念せざるを得なかった。そのため、調査範囲を拡げ文献リストを充実させることは、今後の課題として残されることとなった。とはいえ、日本国内に所蔵する朱子の文集や語録、性理学、『近思録』に関する主だった文献については閲覧するに至ったので、(2)や(4)に関する研究にも役立つことが出来た。

(2) 『御纂朱子全書』『御纂性理精義』に関する調査・検討

『御纂朱子全書』『御纂性理精義』の編纂過程は不明な点が多く、これまでは李光地の文集に収録された上奏文を通して大筋の流れを把握するに止まっていた。本研究では、これらの編纂事業に従事した人物の文集などにも調査の範囲を拡げることで、これまで不明であった編纂過程の一端や同時代の学者の編纂事業に対する考え方についても新たに見出すことが出来た。また、(1)の資料調査を進めていく中で、雍正年間に『御纂朱子全書』を『近思録』と関連づけようとするなど、受容の展開を見通すことが出来た。以上の調査・検討に関する成果については、2021年に研究報告を行った。

(3) 陸隴其の四書学に関する調査・検討

まず、陸隴其の四書学に関する文献の編纂過程や現存する版本の調査を行った。この際には『三魚堂日記』に記載される陸隴其の読書体験や書籍の収集に関する記事を『四書講義困勉録』に附記される執筆時期と突き合わせることで、陸隴其の学問の展開を浮かび上がらせようとした。このことについては、2019年に行った二つの研究報告で発表した。また、この研究を踏まえた上で、陸隴其が朱子の思想変遷をどのように理解し、当時の学者たちと意見を交わしていたかということについても考察を行い、2019年に雑誌論文で成果を報告した。

(4) その他

(1)(2)に関する調査を進めていく中で、明末の高攀龍が編纂した『朱子節要』が清代に編纂された朱子の『文集』『語類』のダイジェスト版に対して少なからず影響を及ぼしていると考えられた。そこで、『朱子節要』および高攀龍の遺著の編纂・出版状況を整理し、それが清代の学者の活動とどのように関わっていたのかということについて考察を行った。このことについては、2023年に研究報告を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 尾崎順一郎	4. 巻 664
2. 論文標題 陸隴其の学問における朱子の思想遍歴について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立命館文学	6. 最初と最後の頁 417-429
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 尾崎順一郎
2. 発表標題 李光地と『御纂朱子全書』の編纂事業について
3. 学会等名 第207回中哲読書会（東北大学）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 尾崎順一郎
2. 発表標題 清代初期における『四書大全』の受容について 陸隴其の取り組みを中心に
3. 学会等名 東北中国学会（秋田大学）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 尾崎順一郎
2. 発表標題 陸隴其的《三魚堂四書大全》編纂与四書学
3. 学会等名 東亜礼学与經学国際研討会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 尾崎順一郎
2. 発表標題 高攀龍『朱子節要』の受容について
3. 学会等名 三浦秀一先生退休記念研究集会「中国古典学とその広がり」（東北大学）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------